

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	鈴木 潤
学位	博士（ 学術 ）
学位記番号	新大院博（学）第104号
学位授与の日付	令和4年9月20日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
博士論文名	田中絹代の「花」と「嵐」－ 女性たちの「女優・田中絹代」と「監督・田中絹代」－
論文審査委員	主査 教授 石田 美紀 副査 教授 番場 俊 副査 准教授 キム・ジュニアン

博士論文の要旨

本論文は、1930年代にスクリーンの「花」として観客から愛された女優田中絹代のスターイメージが、太平洋戦争敗戦からアメリカによる占領期において大きく変化したことに注目し、スターイメージの生成と変遷の力学を分析した。スターイメージは、スクリーンでスターが演じるキャラクターからのみ生まれるのではなく、映画とは直接関連しないものの、その周辺にある映画雑誌や広告媒体といった他メディアにおけるスターの振る舞いから生成され、オーディエンスに共有される一定のパーソナリティのことである。戦前の田中のスターイメージは、娘や若妻であった。しかし、戦後は一変し、敗戦と結びつけられる。映画評論家の川本三郎は、田中は「戦争未亡人の暗い、それゆえに多くの共感を呼んだイメージ」をもち、敗戦の惨めさを引き受ける「不幸の共同体」のスターであると評した。日本映画研究者の北村匡平は、戦後の「新しい女性」として人気を博した原節子とは対照的なスターイメージが田中にはあると指摘している。このように、戦後から現在に至る日本の映画批評・研究言説において、戦後の田中絹代のスターイメージは敗戦とアメリカによる占領と一体となっている。

しかし、これらのスターイメージは実は一面的なものである。なぜなら、田中には多くの女性ファンがいたからだ。戦前から化粧品の広告モデルを務め、多くの婦人雑誌に登場していた田中と女性オーディエンスとの関係は、これまでの研究と批評の双方において看過されてきた。それを端的に示すのが、占領期末期の1950年に田中に起きた「投げキス」事件である。

1950年1月、日米親善芸術使節としてのアメリカ歴訪の旅を終えて羽田空港に降り立った田中は、彼女の帰りを待っていた大勢のファンに向けてキスを投げた。その後、『朝日新聞』が彼女の立ち居振る舞いを「不潔」であると批判したことを契機に、40代に差し掛かった田中の容貌を「老醜」と揶揄する記事などが映画批評誌『キネマ旬報』を中心に多数発表された。当時、田中は精神的に追い詰められ、ヒット作にも恵まれない不遇の時代を過ごした。この事件の苛烈さは、女優の経歴における「嵐」であった。

しかし、それと同時に看過できないのは、バッシングが起きたメディアが、男性記者が記事を書き、男性読者の投稿を積極的に掲載していた『朝日新聞』や、男性知識人の批評や座談会を中心に編集されていた『キネマ旬報』であったことである。実は、この時期においても、女性向けの各種婦人雑誌で田中はアメリカの最新流行を知っていると称賛され、後進女優との対談記事では演技の、人生の「先生」として尊敬されていた。

スターに与えられるスターイメージが単一であるとは限らず、共同体ごとに異なり、それぞれが矛盾をきたすこともある。だとすれば、これまで日本映画史が記述してきた田中のスターイメージは、男性を中心とした共同体におけるそれであったと考えられる。したがって、本論文は、従来の日本映画研究では看過されてきた資料体である婦人雑誌とそこに掲載されている広告を積極的に取り上げ、女性たちの共同体が田中絹代に与えていた肯定的なスターイメージを明らかにした。さらに、女性の共同体が作り上げた田中のスターイメージを、1953年公開の監督第一作『恋文』から計6本の映画を監督した田中絹代に接続し、日本映画界において初めて女優から監督に進出した田中絹代の貢献を指摘した。

本論文が採用した方法論は、リチャード・ダイアーのスター研究であるが、ダイアーの議論を発展させ、共同体ごとに異なるスターイメージの複数性に着目した。それと同時に、敗戦を経験し、アメリカによる占領下にあった日本社会とアメリカとの関わりを重視し、民主主義の象徴として日本映画で制作されることが強く勧告された「キス」と、アメリカ兵に体を売ることによって飢えを凌いだ「パンパン」の双方から、女優としての田中と監督としての田中の仕事の内実を考察した。

本論文は、以下のとおり構成されている。

第1章では、田中絹代の帰国時の「投げキス」が「投げキス事件」になり、「女優・田中絹代」のキャリア最大の「嵐」と位置づけられていく過程を、男性が中心であった新聞、雑誌などにおける記事をもとに明らかにした。それは同時期の女性向け雑誌におけるアメリカ帰りの「女優・田中絹代」の取り扱いとはまったく異なっており、受容者(観客・ファン・読者)の属する共同体によって、スターイメージが大きく異なることが読み取れる。これら対照的なスターイメージの分析を通して、「女優・田中絹代」の投げキスを許せなかったのは、もっぱら男性知識人であったことを指摘した。

第2章では、「投げキス事件」に至るまでに「女優・田中絹代」がどのようなスターイメージをもつ存在として演出されてきたのかを明らかにした。「女優・田中絹代」のスターイメージは、天真爛漫な少女から、戦時中には銃後を支える若妻、そして戦争未亡人へと変化していく。田中絹代は、終戦間際に木下恵介監督『陸軍』(1944)において軍国の母を演じたが、戦後のスターイメージは「軍国の母の戦後」からは始まらなかった。このとき「女優・田中絹代」のスターイメージは、戦前「万年娘役」と評されたとき以上に実年齢と乖離した。彼女の実年齢を揶揄した「投げキス事件」は、その不自然な若返りを是正する契機となっており、スクリーン外の出来事が配役に直接関わった事例であったことを明らかにした。

第3章では、「監督・田中絹代」に焦点をしぼる。1953年に監督第一作を公開する田中絹代が種々の雑誌でどのように紹介されたのかを確認した。当時の映画関連メディアが作り上げた監督・田中絹代のイメージをふまえて、パンパンたちが登場する『恋文』と『女ばかりの夜』(1961)を中心に作品分析を行った。この二作品における演出が、田中自身がパンパンを演じた溝

口健二監督『夜の女たち』（1948）の過剰な演出と異なり、パンパンたちのさりげない視線や動作によって、敗戦と占領を女性たちがいかに経験したのかを描いていることを指摘した。

以上の考察から、「女優・田中絹代」が男性たちによって「不幸の共同体」というスターイメージを背負わされてきたことが明らかになった。それと同時に、男性たちが作り上げてきたスターイメージとは相容れなかったで、女性の共同体は、田中絹代を理解していた。そして田中が監督業に進出し、敗戦から占領という時代の変化に翻弄される女性たちを描くときに選んだ演出は、男性たちが繰り返してきた「不幸の共同体」という言辞ではけっして把握できないものであった。パンパンをはじめとする女性主人公たちは、力強く、冷静に生きている。男性批評家や研究者が見過ごしてきたものは、「監督・田中絹代」が次世代の女優たちを演出し、後進を育てることで、「投げキス」事件を契機に彼女をバッシングすることで男性たちが保とうとした体面と戦っていたことであると結論づけた。

審査結果の要旨

本論文は、日本映画を代表する女優のひとりである田中絹代のスターイメージの変遷を追いかけてながら、スターイメージを形成する社会的・政治的・文化的要素を明らかにしている。本論文は、田中の経歴が1930年代から60年代という日本社会が激しく変化した時代であったことから、そのスターイメージが日本社会のあり方を直接反映するものであったことに着目している。これまでも、多くの先行研究が田中絹代と日本社会の関係を考察してきたが、本論文で実証されたとおり、それらの多くは男性が中心となる共同体で生成し流通したスターイメージのみに依拠してきた。本論文の新しさは2点ある。まずは、先行研究が無視してきた女性雑誌や広告に注目し、それらを丁寧に渉猟し、精読することで、女性読者・女性ファンが田中に対して与えたスターイメージを明らかにしたことである。次に、いわばオルタナティブな田中のスターイメージと、田中の監督作品にみられるパンパンの演出を結びつけ、これまでとは異なる田中絹代と日本社会の関わりを析出したことである。以上の成果は、スター研究や日本映画研究のみならず、大衆文化研究やフェミニズム研究にも貢献するものであり、高い学術的価値をもっている。

たしかに、異なるスターイメージを生成する複数の共同体という極めて興味深い視点を導入しつつも、実際は男性と女性というジェンダーで分けられるふたつの共同体しか扱っていない点、また分析対象となった各種メディアの分類もジェンダーに基づく二種類のみで留まっている点で、分析はまだ十全とはいえない。しかしながら、これらの点は、本論文の今後の展開を示すものであり、その学術的価値を損なうものではない。

なお、本論文が扱う題材と領域は、映画、各種雑誌、広告といった多種多様なメディアと領域にわたるため、博士（学術）の学位が適している。

以上の審査結果から、本論文審査委員会は、全会一致で、本論文が博士論文としての水準に達しており、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判断した。